

平成 30 年 7 月 5 日

記録 鳥澤直矢

1 学校見学

小学部→中学部→高等部の順番に、児童生徒の学習の様子見学及び、教育課程を説明

2 学校評議員自己紹介

- (1) 杉山修様（静岡てんかん・神経医療センター発達支援室 主任）
- (2) 松木生子様（静岡市肢体不自由児者父母の会 副会長）
- (3) 香野毅様（静岡大学教育学部 教授）
- (4) 山倉慎二様（社会福祉法人 つばさ静岡 施設長）

3 委嘱状授与

4 学校概要説明

(1) 学校評議委員について

平成 12 年度から学校評議員の制度が始まり、委員は教育委員会が委嘱をする。学校評議委員会は、地域の一員として本校がどのような役割を行っていくのかについて意見を伺う場である。「中央特別支援学校は、こういう教育活動を行っている。」ということを経験への説明責任を果たす場となっている。

学校評議委員会は、各学校からテーマを投げかけさせてもらいながら議論を進めていく。今年度、中央特別支援学校は、「共生社会を構築する」ことをテーマに話を進めていく予定である。

(2) 学校経営計画について

教育目標「皆と共に 心豊かに たくましく 生きる力を育てる」

皆と共に・・・お互いに人権を尊重しながら、共生社会を目指す。

心豊かに・・・人として心豊かに育てることが教育の基本。

たくましく・・・自らが社会に出ていくための力を育てる。

学んだことを生活に生かせるようにしていく。

ア 「安全・安心」

昔は安心・安全と言われていたが、現在は、安全が先にくる。安全を確実に守った上で安心がある。安全を第一に考えて、安心できる学校にする。

イ 「生きる力を育む授業実践」

学習指導要領が新しくなり、社会のニーズ、これからの教育に求められる学習の基盤となるものが書かれている。他の国では、地域・地区によって、教育の基本的な考え方が、

異なる国も有るが、日本では、学習指導要領をもとに、日本全体が同じ教育で展開されるようになっている。

知識技能をつけるだけでなく、学んだ知識技能をどう生かしていくかを学ぶことが大切になる。私（校長）は理科教員であるが、理科の知識技能をつけながら、科学を通して科学の心、自然の大切さ、命の大切さを伝えていきたい。各教科では、教科の根本となることを伝えていきたい。知識技能を具体的な生きる力に変えていきたい。汎化できるように、学んだことをいろいろな場面で活用できるようにしていく。

ウ 「保護者・地域との連携」

保護者からのニーズもたくさんあるが、学校教育は、教職員だけで行うには限界がある。学校と地域、保護者が連携しながら子どもたちに必要な環境を提供していく。

特別支援教育の推進役として、地域の学校で困っていることについてお互いに助け合いながら学んでいきたい。共生社会に向けて大事なことと考えている。

エ 「学校運営の基盤となる取組」

頼もしい教職員、教育公務員、子どもたちを育てる人として、地域、子どもたち、保護者に信頼される教職員を目指していく。

働き方改革、教員は授業の準備等で夜遅くまで業務をすることが有る。そういった状況であるが、効率よく業務を進めるようにしていく。

子どもたちへの支援が連続したものになるように各部署で協力して連携を取っていく。

具体的に何を行っていくのかが詳しく書かれているものを、学校ホームページに掲載していくのでご覧になっていただきたい。

（3）学習指導要領の改定を受けて、各学部での取組について

ア 小学部

（ア）3組、準ずる教育、下学年適用の教育課程

a 外国語活動・外国語

新学習指導要領の中に、3，4年生に外国語活動を年間15時間、5，6年生に外国語を年間50時間が設けられた。本校は、外国語活動と外国語は英語を行っている。該当学年は3年生の1名と6年生1名。単一の学年で学習をしているが、一部3年生と6年生が合同で学習を行っている。

b 特別の教科道徳

教科書の内容は難しい。各学年の文書を読む力が備わっていないと教科書から読み取ることが難しい。特に6年生の内容は難しいものとなっている。そのまま教科書を使うことが難しいが、学習内容の中で押えたい事柄について、担当教員が内容を噛み砕いて学習を行っている。

c 自立活動

教科の学習に加えて自立活動の学習を行っている。体のこと、コミュニケーションのとり方等、子どもたち一人ひとりにとっての課題を把握して学習を行っている。自立活動の時間があると、他教科の学習時間が削られてしまいがちだが、できるだけ小学校と同じように学習を行っている。

(イ) 2組 肢体不自由・知的障害を併せ持つ児童のグループ

国語・算数・音楽・体育に加え、日常生活の指導、生活単元学習を行っている。昨年度までは、遊びの活動を生活単元学習の中で学んでいたが、今年度より1，2年生において試行段階であるが「遊びの指導」を取り入れている。

(ウ) 1組 自立活動を主とした教育活動のグループ

体のこと、呼吸のこと、姿勢のことなどを学んでいる。今年度から自立活動に加えて、知的代替のグループと同じように遊びの指導、生活単元学習を試行的に取り入れている。

イ 中学部

(ア) 日課の変更

今年度より1時間の授業を55分授業から50分授業へ変更を行った。50分の授業のうち、一部の授業を2つに分けて25分の授業の時間を設け、自立活動や基礎基本を学ぶ時間としている。基礎基本を学ぶだけでなく、新学習指導要領にある、主体的・対話的で深い学びができるように、これから研修を深めていかなければならないと考えている。

(イ) 重複障害の生徒の指導の充実

合わせた指導、自立活動についての見直しを、中学部はまだ行っていないが、小学部の試行を参考にしながら、中学部にも取り入れて行きたいと考えている。

教科の指導を重複障害の生徒にも行っていく視点を持つようにする。教科の視点から見た授業を行っていけるようにしていきたい。

(ウ) 特別の教科道徳

来年度からの試行に向けて、小学部の教科書を見せてもらいながら、どのように授業を行っていくかをこれから考えていきたい。

ウ 高等部

(ア) 学習指導要領について

現行の学習指導要領の押さえを知り、新しい学習指導要領になって変更したことは何かについて学んでいる段階。現行の学習指導要領、グループ編成の基本事項、個別の指導計画の3つをもとに、各学習グループの中心的な学習について見直している。その見直しをもとに、新学習指導要領とすり合わせをしていく予定である。

(イ) 教科学習のグループ

教科学習のグループにおいては、各教科の授業担当者が集まり、毎学期、情報交換を行っている。また、授業の主体者（生徒）が授業の中で何を学んだか、を言えるような振り返りの時間を取り入れている。

(ウ) 自立活動

自立活動については、肢体不自由校であるが、運動動作に関し専門性に課題も有るので研修を行っている。

(エ) 道徳

道徳の授業については、高校は、普通の教育課程には無い。知的の教育課程では行う。小学部、中学部の様子を見ながら、今後どうすれば高等部の教育活動に取り入れられるかについて考えていく。

(オ) 卒業を見据えて

小学部、中学部、高等部の指導の系統性を大切にしながら、出口（卒業）を見据えた教育活動を取り組むこと、生活年齢に沿った接し方、教材、学習内容で取り組めるようにしていく。

エ 病弱学級・訪問教育

(ア) 病弱学級

わかくさ学級、おおぞら学級

(イ) 訪問教育

きらら学級、そよかぜ学級、つばさ学級、わかくさベットのサイド、わかくさ高等部

5 評議委員の方からの質問・御気付きになった等

松木様

高等部の生徒が、整然と落ち着いて学習していることに驚いた。息子が高等部にいたときには、発達障害で精神的な問題を抱えている生徒が多く在籍していて、問題が多発していた。その頃に比べると落ち着いている様子が見られた。

徳永

ありがとうございます。問題を抱えている生徒も在籍をしています。そのような生徒については、職員で連携を取りながら丁寧に対応をしているところです。

副校長

高等部生徒は多感な時期なので、問題を抱えている生徒も多くいるが、適切に対応している。

杉山様

発達障害の特性のある生徒さんが目立っていなかった。教員との関係性、環境の構造化がきちんとされていれば、問題が出にくいと考えられる。

家庭で発達障害の困難さを抱えている生徒に対して、学校で構造化していることをどのようにして汎化していくかということが学べるといい。

徳永

生活3グループの生徒に該当する生徒がいる。職員も学び、試行錯誤しながら取り組んでいる。学校で行っていることを家庭に報告している。学校も家庭の様子について、報告してもらっている。しかし、生徒の中には、登校できていない生徒もいる。

杉山様

学校教育の中で、生きる力を育てることや社会参加のためにこういった取組や支援をしているのか教えていただきたい。

徳永

障害特性については、情報収集、把握に努めている。登校が難しい生徒については、学校だけでなく、地域の関係機関と連携を取っている。本人に取ってふさわしい社会参加について考えながら取り組んでいる。

香野様

高等部の生徒の中学校、小学校時代の様子をどのくらい把握できているのか？

地域コーディネートは特別支援学校がやるのか、市がやるのか？また、担当者の問題なのか、構造の問題なのか分からないが、あまり機能していないと感じている。

特別支援学校の不登校の開始は支援級時代が多い。特別支援学校に入ってから不登校になるケースは少ない。支援級の時期にアプローチをしたほうが良いと考えている。

徳永

高等部の生徒はいろいろな地域から来ている。入学選考前には重要な情報をもらえず、入学してから、実はこうでしたという重要な情報をもらうことが多い。

香野様

今年度静岡県は、不登校の全国1位になった。特に静岡市は、不登校の生徒が多い。

関西圏は支援級が多い。児童生徒のカルテが支援級、通常級の両方で持っている。ということは、すでに情報を持っているため、入学や転学してから驚くといったことは無い。

杉山様

高等部卒業まで順調だが、卒業後に引きこもってしまうケースが有る。家族の問題や地域の問題も有るが、学校側で教育を見直すことも有るのではないかと。

校長

静岡県は、拠点校方式で支援級を設けている。支援学級は複式学級で一人の教員で多くの児童生徒を指導している。クラスが上手に回っていないという困難さもある。

他都道府県では、支援学級への就学が多いが、静岡県は特別支援学校への就学が多い。

卒業生の中には、社会に出た時にうまく適応できず、相談に来るケースが有る。時に、薬を服用しないと行動を調整できない方がいるので、医療機関との連携は不可欠。

障害のある人達の生涯学習をどうしていくべきか。人間は常に何かを求めたり学んだりしていく中で自分を高めたりコントロールしたりしている。生涯学習の機会がないと、学校教育が終了した後に、自分ができる行動の範囲が狭まるのではと危惧する。仕事をするのが全てになってしまうのではないかと。

社会とのつながりのために、どういったケアができるか。独り立ちした時に自分でどう判断してどう行動していくかのための教育をしていく必要はある。

副校長

卒業後の健康やメンタルヘルスについて感じていることはありますか？

山倉様

学校教育の中で、医療は主役になってはいけない、医療は脇役。教育が主。中央特別支援学校は、それが、しっかりと守られていると感じている。

気管切開がありながらも歩けるエネルギーがある生徒は、今まで制度のはざまにあったために、ケアする場所がなかったことが、今後やっていかなければならない課題の一つとなっている。重症心身障害児者という言葉ではなくて、医療的ケア児者という言葉に変わりつつある。成人になって以降の健康に関しては、医療が行っていく必要がある。

高校卒業後、教育から切り離されてしまうのはあまり良くない。障害児者はどうしても受け身の教育をされてきていて、しかも幼い内容、絵本の読み聞かせであったり、子どもっぽい音楽を聴いたりになりがちであった。卒業後の教育は、幼い内容はやめよう（絵本、幼い音楽等）ということで、つばき静岡では、訪問カレッジと銘打って今度やってみようという計画をしている。卒業した人を対象に生涯教育の一環として、卒業後に少しでも力になれるように、学校が終わったらそれきりではないのだよということをアピールしていければと思っている。

副校長

個別の教育支援計画の繋がりをもたせる。保育園から高等部卒業までの本校内でのつながりはあるが、学校間（他校とのやり取り）となると課題がある。私達の学校でできることは何かを今後見つけていく必要がある。

6 安全・安心な学校づくりについて（災害時の対応について）

副校長

地震の対応で課題になっていることは、医療が必要な子どもたちに対して、福祉避難所になっている本校は、どこまで、どんなことができるだろうかということ。

こども病院では、「緊急性が高い子供を受け入れる。」とのこと。これは、どこの病院も同じ。医療的ケアは生活行為なので、救命救急ではないので受け入れてもらえるのか、もらえないのかが分かりにくい。

麻機地区の地域医療のネットワークは、どうなっているのかを知りたい。卒業後の在宅、地域の中で、障害のある人を抱えた御家庭は保護者頼みになってしまうのではないか。地域医療のネットワークはどうなっているのかについて知りたい。

校長

在宅支援事業所や、訪問看護ステーションなどが大規模災害時にどういう動きをするのか？を確認しながら、関係各所と連携していきたい。災害時の看護師の動きについても教えていただけたらと思っている。

副校長

災害時、学校が崩れずに、生活できる環境であったら、緊急時とはならないとはならないと聞いている。地域の中でネットワークを求めているが、なかなか横に繋がっていない状況にある。今後の課題である。